第2章

江戸時代以前の木曽の暮らし
（縄文時代、木年貢、神木、義仲など歴史）

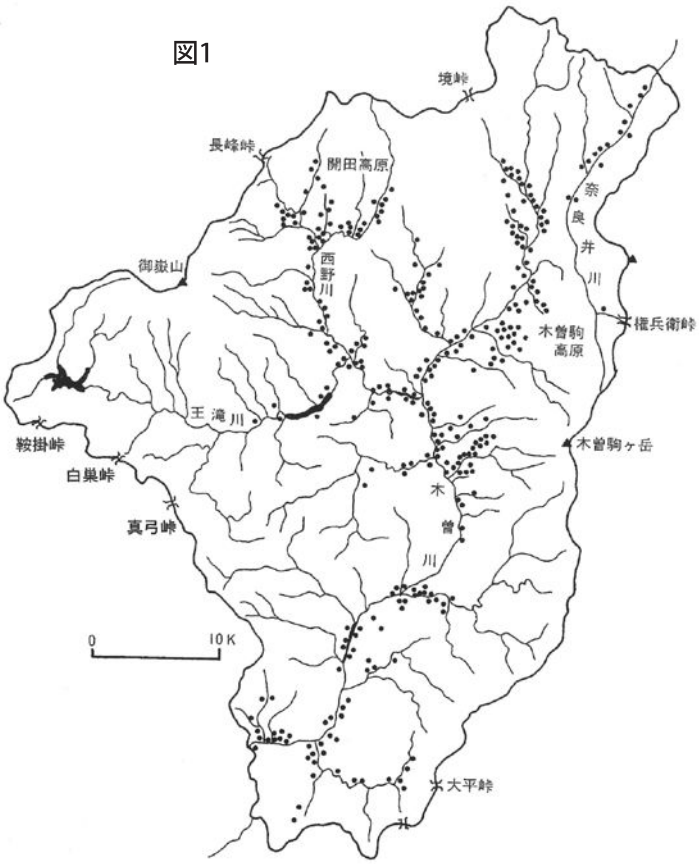
縄文時代の木曽

木曽の縄文人の往来と遺跡分布

旧石器時代から獣を追う移動は獣道（けものみち）を辿って往来していましたが、やがて川沿いを往来し、人の道ができました。川の本流沿いが主な道筋で支流も遡ました。上流では山並みの中に峠を見つけて山越えをしました。

木曽の遺跡は、木曽川や王滝川などの支流に沿って分布しています（図1）、遺跡から出土する土器は峠を越えた地域（松本・伊那・飛騨）で作られたものも多く、当時から峠越えの往来があったことがわかります。

図1



縄文中期遺跡一覧

番号	遺跡名	所在
83	上の原	木曽町日義
84	お玉の森	
85	マツバリ	
86	島尻	木曽町
87	板敷野	
88	小島	木曽町三岳
89	崩越	王滝村
90	里宮	
91	徳原A	上松町
92	金比羅	
93	お宮の森裏	
94	日向	
95	田代（井口原）	
96	吉野遺跡群	
97	最中	
98	最中上	
99	大野	大桑村
100	田光松原	
101	清水	
102	万場	
103	川向	
104	太田垣外	南木曽町

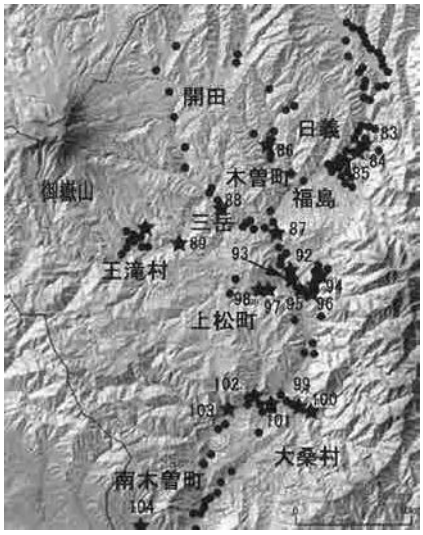


図2木曽の中期遺跡分布
（『長野県考古学会誌』143,144号表1より抜粋）

■主要参考文献／
『村誌大瀧歴史編Ⅰ』（長野県木曽郡王滝村発行 2020　神村透 執筆部分引用）

縄文時代中期　文化　大桑村

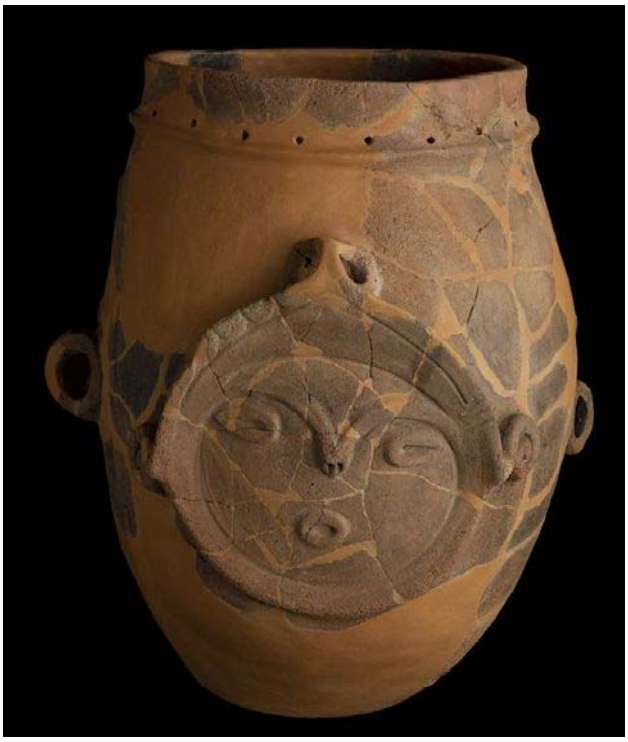
悠久のほほ笑み（ゆうきゅうのほほえみ）

人面装飾付有孔鍔付土器（じんめんそうしょくつきゆうこうつばつきどき）

■基本データ

種類　人面装飾付き有孔鍔付土器
発掘場所　大野遺跡・竪穴住居跡より出土
年代　縄文時代中期（約4000～5000年前）
指定　県宝(2018年)

展示　大桑村歴史民俗資料館
木曽郡大桑村殿(大桑スポーツ公園内)1-58
／TEL 0264-55-3550
営業時間　3月上旬～11月下旬
マップQR
アクセス　JR「須原駅」から徒歩10分



人面装飾付有孔鍔付土器は、1999年（平成11）大桑村の大野遺跡（おおのいせき）で発掘された縄文時代中期（約4000～5000年前）の竪穴住居跡から出土しました。現在“日本一大きな顔”とされ、全国的に注目を集めています。2018年（平成30）には、長野県宝にも指定され、愛称も公募の中から“悠久のほほ笑み”に決まりました。

▲有孔鍔付土器の特徴を示す部分

▲土器が出土した竪穴式住居の跡
(22号住居址)

大野遺跡は1999年（平成11）に発掘調査に着手し、ストーンサークル(環状列石)がほぼ完全な形で残っており、それを取り囲むように建物や竪穴式住居の跡が見つかるなど際立った特徴を見せる遺構が出土しました。

土器は竪穴式住居群の一つから出土したものを復元し2001年（平成13）10月に大桑村指定の有形文化財として指定しました。

大桑村では1996年度～2010年度（平成8～22）に県営中山間地域総合整備事業（ほ場整備）を行いました。この事業と同時に、予定地内にある遺跡の埋蔵（まいぞう）文化財について記録保存するため発掘調査を行いました。

調査は153遺跡、総面積約38,000㎡にのぼり、どの遺跡からも当時の生活の様子を知る貴重な資料が出土しました。

大桑村歴史民俗資料館

大桑村は縄文時代の遺跡が数多くあり、人々の生活の跡が村内の各所の遺跡に見られます。

大桑村歴史民俗資料館は森林と道をテーマとした村内の埋蔵文化財、中山道、大正時代以降の日用品を展示しています。

ホールの天井は、伝統的な小屋組技法によって建てられています。この天井を支えるのは、木曽五木（ヒノキ、コウヤマキ、サワラ、アスナロ、ネズコ）の大木です。

大桑村歴史民俗資料館

■主要参考文献／『広報おおくわ530号』（2018）
報告書／『百瀬編』（2018）　中山総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

縄文時代草創期　文化　上松町

おみやのもりうらいせきしゅつどつのくり

お宮の森裏遺跡出土のクリ

■基本データ
種類　考古資料
発掘場所　お宮の森裏遺跡・竪穴住居跡より出土
年代　縄文時代草創期（約12,900～12,700年前）
指定　町指定有形文化財（2018年）
所蔵　上松町公民館
木曽郡上松町小川1706／TEL 0264-52-2111

寸法・材質・形状
1－高さ13.2mm、幅12.9mm、厚さ7.9mm、0.34ｇ
2－高さ11.7mm、幅12.5mm、厚さ8.6mm、0.55ｇ

国道19号線のバイパス工事の着工に伴い、1992～1993年（平成4～5）に「お宮の森裏遺跡」の発掘調査が行われました。縄文時代草創期の竪穴住居跡から原形をとどめている縦横約1センチのクリの実2個と、数ミリのかけら約40g（クリの実約90個相当）で、実は皮がむかれた状態でした。

発掘した遺物は町教委が保存。発掘調査報告書においても最古の資料であることが記載されていましたが、2016（平成28年）に放射性炭素年代測定を行った結果、約12,900～12,700年前のものであることが判明しました。クリの子葉（しよう）としては国内最古。縄文時代初期の食生活を知る上で貴重な資料だといえます。

縄文時代中期　文化　上松町

がんめんそうしょくつきふかばちけいどき

顔面装飾付深鉢形土器

人面様の装飾が口縁部外面の四方(少なくとも三方向)に施された深鉢形土器で、吉野遺跡群から出土しました。約7.5haという大規模な発掘調査の際、縄文時代中期前葉と位置づけられる礫集中を伴う竪穴住居址が複数検出され、そのうちの一軒からみつかったものです。悠久のほほ笑み同様、信州の特色ある縄文時代中期の土器として長野県宝に指定されています。

■基本データ
種類：考古資料　発掘場所：吉野遺跡
年代：縄文時代（約5,000年前）　指定：県宝（2018年9/27）
展示：上松町公民館　木曽郡上松町小川1706／TEL 0264-52-2111

縄文時代中期　文化　南木曽町

おおたがいといせきこはくたいしゅ

太田垣外遺跡琥珀大珠

太田垣外遺跡は、縄文時代中後期を中心とする遺跡で、1994（平成6年）に発掘調査が行われ、住居址21軒をはじめとした多くの遺構のほか、多数の遺物が出土しました。なかでも琥珀大珠は全国で3番目に大きなもので、琥珀の出土例が多い諏訪方面からの搬入品と推察されています。このことは、これほどの宝玉を所持する特別な祭祀者が太田垣外遺跡に存在したことを示すとともに、この遺跡が木曽南部の拠点集落であったことを裏付けるものです。

■基本データ
種類：考古資料　発掘場所：太田垣外遺跡
年代：縄文時代（約5,000年前）　指定：町指定有形文化財（2004年7/7）
寸法・材質・形状：大きさ－縦4.7cm、横4.2cm ｃｍ、厚さ2.7cm
木曽郡南木曽町吾妻2190（南木曽町博物館）

旧石器時代　文化　木曽町

ゆうぜつせんとうき「やなぎまたポイント」

有舌尖頭器「柳又ポイント」

尖頭器(ポイント)という石器は、日本では主におよそ3万から1万1千年前頃(旧石器時代から縄文時代草創期頃)に狩猟に用いられたとされる石製の槍先です。木曽町開田高原は柳又遺跡をはじめとするこの時期の遺跡の密集地で、逆三角形の短い舌部(槍の柄に付ける部分)が特徴的な有舌尖頭器が出土しており、遺跡名を冠して「柳又ポイント」と呼ばれています。当時は氷河期で、寒冷な気候でありながら高原を活動の場としていることから、寒冷環境に適応した大型の動物を狙って狩猟をしていたのかもしれません。

氷河期が終わり、温暖化しつつあった約1万1千年前頃になると縄文時代早期となります。この頃には、尖頭器を用いた槍の使用は少なくなり、石鏃を用いた弓矢や犬を使用した狩猟、定住的なムラの生活が本格化し始めます。木曽地域では遺跡の分布が高原から谷地域へと拡散し、環境の変化に伴って生活が大きく変わったことが想像できます。

■基本データ
種類：考古資料　発掘場所：柳又遺跡　木曽郡木曽町開田西野6503-1 ほか
年代：旧石器時代（約20,000年前）　展示：開田考古博物館

■主要参考文献／『お宮の森裏遺跡のクリ』の年代測定結果は出版準備中

武士の時代へ
木曾義仲の活躍

信濃源氏の武将で朝日将軍と称された

木曾義仲公（徳音寺所蔵）

木曾義仲（源 義仲）は、平安時代末期の信濃源氏の武将です。河内源氏の一族、源義賢の次男として生まれ、源頼朝・義経兄弟とは従兄弟にあたります。『平家物語』においては朝日将軍（旭将軍とも）と呼ばれています。

幼名は駒王丸といい、1155年（久寿2）駒王丸が2歳のとき、大蔵合戦がおこりました。この戦いで義賢やその一族のほとんどが討ち死にし、幼い駒王丸もあやうく殺されてしまうところでした。しかし、畠山重能と斎藤別当実盛のはからいにより駒王丸と母・小枝御前は助けられました。実盛は信濃国（現在の長野県）木曽の中原兼遠に駒王丸の養育を頼み、駒王丸は自らの姓となる木曽の地へ来ることになります。

『吾妻鏡』（鎌倉時代に成立した日本の歴史書）によれば、駒王丸は乳父である中原兼遠の腕に抱かれて信濃国木曽谷（現在の長野県木曽郡木曽町）に逃れ、兼遠の庇護下に育ち、通称を木曾次郎と名乗りました。諏訪大社に伝わる伝承には一時期、下社の宮司である金刺盛澄に預けられて修行したといわれています。後に手塚光盛などの金刺一族が挙兵当初から中原一族と並ぶ義仲の腹心となっています。

以仁王の令旨（皇族の命令を伝える文書）によって挙兵、都から逃れたその遺児を北陸宮として擁護し、倶利伽羅峠の戦いで平氏の大軍を破って入京しました。連年の飢饉と荒廃した都の治安回復を期待されましたが、治安の回復の遅れと大軍が都に居座ったことによる食糧事情の悪化、皇位継承への介入などにより後白河法皇と不和となります。法住寺合戦に及んで法皇と後鳥羽天皇を幽閉して征東大将軍となりますが、源頼朝が送った源範頼・義経の軍勢により、粟津の戦いで討たれました。

木曽馬と義仲　倶利伽羅峠の合戦

「弓馬の道」といわれたように、義仲の時代、合戦は騎射の争いでした。戦闘能力の優劣は馬と、それを乗りこなす者の力量で決まり、優れた馬を放牧しているところには優れた騎手が育ちます。

挙兵した義仲は信濃と上野の御牧（古代の朝廷の直轄牧場）を押さえることで最強の軍事力を手に入れようとし、32あった全国の御牧の8割を支配下に置きました。

この戦力が威力を発揮した代表的な例は、倶利伽羅峠の合戦です。義仲の先方は、騎乗した勢子（馳せ馬）と馬に乗った射手（待弓）を配置し、平家の大軍を倶利伽羅峠に追い落としました。

この戦いでは、義仲率いる源氏軍５万騎、平家10万騎が相対しました。義仲が多くの旗を掲げて平野で待ち構えているように見せかけたため、平家の軍は山から襲われる可能性はないと考えました。

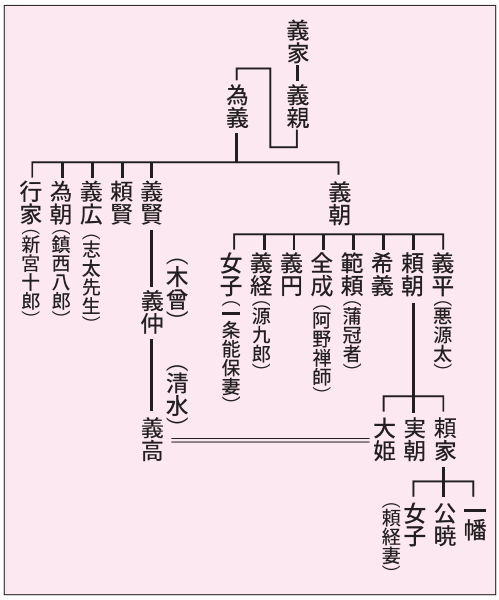
義仲は木曽馬をはじめとする山岳地帯に適応した馬や騎手の力で、背後の山から１万余騎で攻め立てました。切り立った山から攻めてくるとは思いもよらなかった平家側は、奇襲に浮足立ち、我先に逃げようとして、崖のように切り立った倶利伽羅峠の深い谷へ転がり落ちていったといいます。

生き残った平家軍はわずか2,000余騎。岩間から湧き出る泉はその血を流し、死骸は積み重なって丘となったといわれています。このために、あたりの谷には、矢の穴、刀の傷が、今もそのまま残っているといわれています。

木曾義仲年表

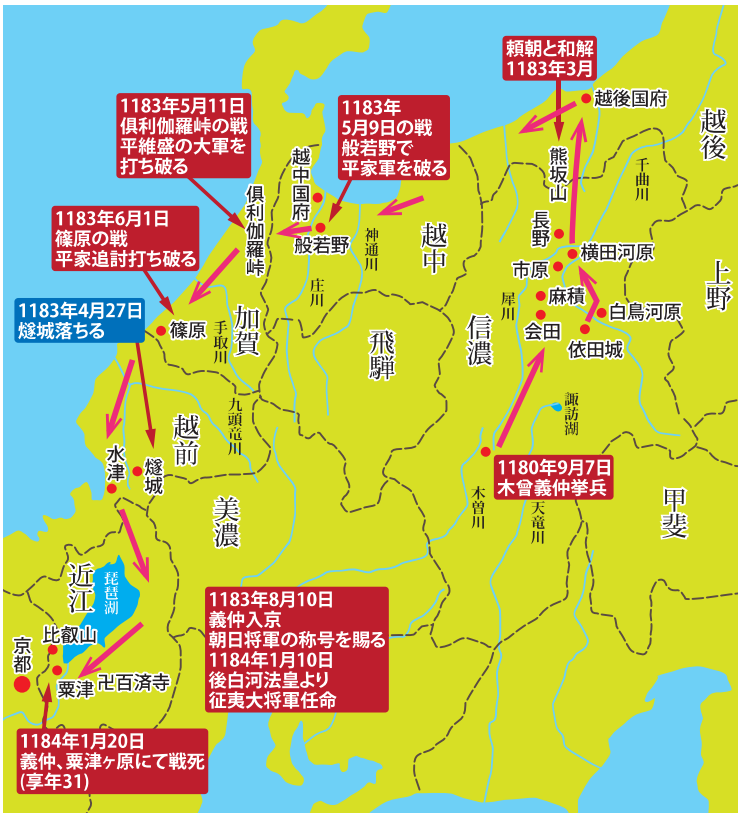
1154年（久寿元）		義仲（駒王丸）生まれる。
1155年（久寿2）	8月16日	義仲の父義賢が武蔵国比企郡大蔵館で甥の源義平に討たれる。 義仲は斎藤別当実盛に助けられ、木曽に逃れて中原兼遠に養育される。
1166年（仁安元）		義仲元服。
1180年（治承4）	4月9日	源頼政、以仁王から平家追討の令旨を得て、諸国の源氏に伝える。
	9月7日	木曾義仲挙兵。（現在の日義宮ノ越）
1181年（養和元）	6月13日	平家方の城氏越後より信濃へ攻め入る。
	6月14日	義仲、横田河原（長野市）に迎え討ち大勝する。
1183年（寿永2）	3月	義仲、頼朝と不和となるが長子義高を人質として送り和解する。
	5月9日	義仲、兵を進め越中般若野で平家軍を破る。
	5月11日	越中砺波山の東に陣を取り、夜に入って平維盛の大軍を打ち破る。（倶利伽羅峠の戦）『平家物語』
	6月1日	平家を追って加賀国篠原で捉え、討ち破る。 義仲軍の武将手塚光盛 思人の斎藤別当実盛を討つ。
	7月25日	迫る義仲に、防衛を断念した平氏は安徳天皇を奉じ京都を逃れる。
	8月10日	義仲入京。左馬頭兼越後守に任ぜられ、朝日将軍の称号を賜る。
	10月1日	平家追討の命を受けた義仲軍、備中水島の戦いで平家軍に敗れる。
1184年（元暦元）	1月10日	義仲、後白河法皇より征夷大将軍に任じられる。
	1月20日	源範頼、義経の軍、勢多 宇治で義仲軍を破り京都へ入る。義仲、近江の粟津に戦死する。今井兼平、根井行親らも戦死。
	2月19日	屋島の戦。
	3月24日	壇ノ浦の戦。遂に平家滅ぶ。

源氏系図



■参考資料／上松町史第三巻より
源氏系図（日本の歴史」小学館）

義仲上洛の進路図



■参考資料／上松町史第三巻(田屋久男 図)より引用

義仲をめぐる人々

源義賢（みなもとのよしかた）

木曾義仲の父。在京時代は東宮御所の舎人（とねり）の長だったことから「帯刀先生（たちはきせんじょう）」と呼ばれました。義仲が2歳のときに、兄である義朝の長男義平に攻められて討たれます。

小枝御前（さえごぜん）

木曾義仲の母。1155年（久寿2）、夫の義賢が殺されたとき、二歳だった駒王丸（後の義仲）を抱いて武蔵国大蔵から木曽の地まで逃れました。義仲にとっては幼い命を守り通してくれた母といえます。義仲が元服して間もない1168年（仁安3）に亡くなりました。

中原兼遠（なかはらのかねとお）

木曾義仲の養父。斉藤実盛に懇願された兼遠は、父を討たれ逃れてきた駒王丸を25年間木曽の山下の屋敷に隠して密かに養育しました。

源行家（みなもとのゆきいえ）

本名を義盛といい、源為義の十男。義仲の叔父にあたります。行家は後白河天皇の第三皇子以仁王（もちひとおう）の平家追討の令旨（りょうじ）を、木曾義仲をはじめ諸国の源氏勢力に伝えた人物です。

斎藤別当実盛（さいとうべっとうさねもり）

平安後期の武将。1155年（久寿2）、源義賢が討たれたとき、2歳だった駒王丸の殺害を命じられた畠山重能（はたけやましげよし）は、幼子を殺すのは気の毒だとして斉藤実盛に逃がすよう命じます。実盛は木曽の中原兼遠を頼って駒王丸を密かに逃しました。28年後、義盛は加賀篠原の戦で義仲軍に討たれます。その首が白髪を染めていた命の恩人実盛だと知り、義仲は涙を流したと「平家物語」に記されています。

義仲の妻 伊子（いし）

関白藤原基房の姫で義仲が入京後妻にした女性。結婚から半年足らずで義仲は討ち死にし未亡人となります。その後久我通親の側室になり、男子を出産。この男子がのちに曹洞宗永平寺を開いた道元です。

義仲の妹 宮菊（みやぎく）

宮菊は義仲の異母妹で「菊女」とも呼ばれています。宮菊は源頼朝の妻政子と猶子（ゆうし）の契りをしていたといわれます。中津川市馬籠に創建した法明寺は、現在、五輪塔が数基残されている付近がその跡とされています。

義仲四天王と女性武者

根井行親（ねのいゆきちか）

平安末期佐久地方の根々井に栄えた豪族。1180年（治承4）、木曾義仲が平家追討の挙兵をすると一族で活躍し、勲功をたてました。

樋口次郎兼光（ひぐちじろうかねみつ）

中原兼遠の次男。義仲の乳母子（めのとご）の一人で、1180年（治承4）義仲に従って上洛した武将です。1183年（寿永2）の倶利伽羅峠の戦では三千騎を率いて大勝利のもとをつくりました。NHK大河ドラマ「天地人」の主人公、直江(なおえ)兼続(かねつぐ)（樋口兼続）は樋口兼光の子孫と言われています。

今井四郎兼平（いまいしろうかねひら）

中原兼遠の四男、義仲の乳母子の一人で、義仲の最も信頼した豪勇の武将。1184年（元暦元）、近江粟津原の戦での兼平と義仲最期の場面は、「平家物語」に感銘深く描かれています。

楯六郎親忠（たてろくろうちかただ）

根井行親の子で義仲のために活躍した有力武将。1181年（養和元 ）、横田河原の戦で親忠は、義仲の命を受けて敵情を偵察し報告したことが「源平盛衰記」に載せられています。

巴御前（ともえごぜん）

義仲の養父中原兼遠の娘で、義仲四天王といわれた樋口次郎兼光、今井四郎兼平兄弟の妹。武術を身に着けた美貌の女武者だったと「平家物語」は伝えています。義仲最期のとき、巴は獅子奮迅の働きをします。義仲とともに死ぬことを願いましたが、義仲に諭され涙ながらに落ち延びます。その後、和田義盛の妻となり、91歳で生涯を終えたといわれています。

葵御前（あおいごぜん）

義仲の挙兵にしたがって戦った女武者。市原の戦のとき義仲側で戦った栗田寺別当範覚の娘といわれています。倶利伽羅峠の戦のとき砺浪山で討死したといわれています。

山吹姫（やまぶきひめ）

義仲が平氏追討の挙兵をしたとき、これに従って上洛した女性の一人。山吹姫は多様な伝承を持った女性であり、それだけ謎めいた人物でもあります。

木曾義仲ゆかりの中原兼遠、巴御前の歴史を残している

王滝村の秘境　滝越（たきごし）

中原兼遠を祭神として祀る王滝村滝越の八王子神社

王滝村滝越は栄村秋山郷、下伊那の遠山郷と並ぶ秘境の地です。滝越の八王子神社の祭神は、巴御前の父親で義仲を養育した中原兼遠が「祭神」として祀られており、武将が祭神の神社は木曽では唯一の例と言われています。

滝越は鎌倉幕府の御家人の対立による敗者が、滝越の奥約10kmの三浦（みうれ）ダム湖底になっている「三浦平」に落ち延び、その後寒冷の三浦平から生活しやすい滝越へ移ったと伝えられています。

1935年（昭和10）頃、三浦ダム建設で王滝森林鉄道が水没するため、路線変更の工事中、三浦平から刀剣16振りが出土。当時の福島警察署へ王滝村役場から届けた書類が残っています。

三浦太夫伝説（地域の落人伝承）が江戸時代の地誌に収録

木曽を領有した尾張藩が、1757年（宝暦7）、家臣松平秀雲に命じて木曽の状況を調査記録し、『吉蘇志略』として刊行しています。秀雲は滝越を訪れ、滝越だけでなく、10km以上奥の三浦山（三浦平）にまで足を運び、吉蘇志略に『和田義盛は戦いに敗れ一族死せり、ただ朝比奈三郎義秀終わるところを知らず。義秀の母は巴女なり。巴女は木曽兼遠の女（むすめ）なり。義秀は外孫なり。滝越の百姓、兼遠を地主神として祀る。』と書いています。これは1213年（建保元）、和田合戦に敗れた和田一族のうち、朝比奈三郎義秀（和田義秀）が三浦平へ落ち延びてきたという滝越の伝承を基に書いたと思われます。和田義秀落人説の他にも、宝治合戦に敗れた三浦家村落人説なども伝えられています。

義仲館

郷土愛が地名に

1874年（明治7）11月7日筑摩県筑摩郡 原野村・宮ノ越村が合併して日義村となりました。村名の由来は木曾義仲が平家討伐の旗挙を行った地であることから、朝「日」将軍木曾「義」仲にちなんで「日義村」と命名されました。現在は木曽郡木曽町日義という地名でその名を残しています。

笹竜胆（ささりんどう）紋
木曾義仲の家紋

■主要参考文献／『王滝村の秘境滝越』楯英雄

木曾義仲関連史跡

1 徳音寺 とくおんじ 木曽町日義 124

源義仲一族の菩提寺。元は、上流の巴ヶ淵近く、山吹山の麓の集落に栢原寺（かやはら）がありましが、土石流の被害により現在地に移し、徳音寺としたといいます。栢原寺があった集落の地区名は徳音寺といいます。1579年（天正7）大安和尚が中興し、現在の堂宇（どうう）は幕末の再建です。

伝承 義仲が亡くなると、役目を終えた巴御前は竜神の姿に戻り、再び巴ヶ淵の川底に戻りました。その後、その遺徳をしのび、戒名「龍神院殿真巌玄珠大姉」が与えられ義仲の菩提寺である徳音寺に供養塔が建立されました。

宣公郷土館 せんこうきょうどかん（現在、拝観不可）

徳音寺の境内にある1967年（昭和42）開館の歴史博物館。木曾義仲公の遺品を中心に、中山道の宿場町として栄えた宮ノ越宿の民俗資料を展示しています。

木曾義仲の遺品、義仲の守り本尊（兜観音菩薩）、宿場関係資料、義仲・巴御前・樋口次郎兼光・今井四郎兼平らの画像があります。

2 義仲館 よしなかやかた 木曽町日義 290－1

木曽町にゆかりを持つ木曾義仲公や巴御前の存在を後世に継承することを目的に1992年（平成4）に開館した資料館です。開館から30年近くが経過する中、地域内外からの要望を受け、これまで以上に地域に愛され郷土に誇れる施設となることを目指し、2021年（令和3）7月4日にリニューアルオープンしました。

3 旗挙八幡宮 はたあげはちまんぐう 木曽町日義 2150

木曾義仲が、養父中原兼遠と共に京へ上った時、源氏一門が崇敬する石清水八幡宮を勧請したと伝えられています。この辺りは宮ノ原と呼ばれ、木曾義仲が1166年（仁安元）13才で元服した折、館を当地に構えたといわれています。1180年（治承4）当地にて、以仁王（もちひとおう）の令旨を受け千余騎を従えて、平家打倒の旗挙をしました。以来、旗挙八幡宮と呼ばれています。

また、大欅は、元服を祝って植えられたとも旗挙をした時に植えられたとも云われ、義仲七本欅といわれた欅も現存するのは、この欅のみです。2002年（平成14）3月、日義村の文化遺産として枯幹の保全事業が行われました。大欅の傍らには、樹齢150年余りの2代目欅が大欅からの実生で生育しています。

4 巴ヶ淵 ともえがふち 木曽町日義

伝承 巴御前はこの淵で泳ぎの鍛錬や、武芸の修練などを行ったと伝えられています。また、この淵に住む竜神で、義仲の守護神となる為に中原兼遠の娘として生まれてきたという伝説が残されています。

5 林昌寺 りんしょうじ 木曽町日義原野 4296

木曾義仲を養育した中原兼遠（なかはらかねとお）の菩提寺です。1180年（治承４）、義仲が挙兵すると子の樋口兼光と今井兼平はこれに従い、兼遠は出家して林昌寺を建立したといわれています。境内には薬師寺・観音堂・中原兼遠の墓などがあります。

6 中原兼遠館跡 なかはらかねとおやかたあと 木曽町新開

駒王丸（木曽義仲の幼名）が中原兼遠によって源氏からかくまわれ、13歳の元服（げんぷく・公家や武家で、成人になったことを示す儀式）までの幼少期を育てられた屋敷跡といわれています。正面の古松は義仲元服の松と呼ばれ、水田の中の竹林には兼遠塚の碑があります。

7 手習天神 てならいてんじん 木曽町新開町組

町組の旧中山道東側に建つ。山下天神とも呼ばれていました。木曾義仲を養育した中原兼遠が、学問の神として勧進したのが始まりと伝えられています。江戸末期の上田村の宮大工武居仙右衛門作の社殿があり、その横には樹齢千年のイチイの大木が立っています。

8 興禅寺 こうぜんじ 木曽郡木曽町福島 5659

永享6年（1434）木曽氏12代・木曽信道が鎌倉建長寺5世の円覚大華を迎えて創建したと伝わります。

木曾義仲の御影観音は1492～1501年（明応年間）に木曽義元が興禅寺を中興した際に勅使門とともに城山から遷されました。木曾義仲、木曽義康・義昌父子、山村氏歴代の墓地がある。寛永、明治、昭和に3度の大火で往時の面影はほとんど残っていません。

9 長福寺 ちょうふくじ 木曽町福島門前 5690

長福寺には「巴御前の長刀」と伝えられる刀剣があります。1927年（昭和2）の火災で木曾義仲の陣太鼓や馬具などの寺宝を消失しましたが、焼け跡から拾い出された中にこの長刀がありました。

10 定勝寺 じょうしょうじ 大桑村須原 831-1

国指定重要文化財（本堂・庫裏・山門）の定勝寺は、木曽三大寺中の最古刹です。

1387～1389年（嘉慶年間）に木曽家第11代の源親豊が祖先菩提のため木曽川畔に創建しました。

その後、木曽川の洪水により３回流失し、1598年（慶長3）に現在の場所に移建されました。

また、定勝寺には戦国時代木曽谷を支配した戦国大名「木曽義昌」の位牌が安置されているほか、東洋一の木曽ひのき製「定勝だるま」大坐像があります。

日本遺産木曽路 構成文化財 28 定勝寺 99P参照

通の浮石 かよいのうきいし

伝承 巴御前が礫を木曽川に向って投げた石が、不思議な事に夜になると川を下り「ヤヨヒ」と呼ばれる所に移動する。通の浮石と伝えられています。

11 天長院 てんちょういん 大桑村長野 1850

室町時代に木曽家祈願所として建立されました。当時は広徳寺として伊奈川大野地区にあったそうです。

1532～1389年（天文年間）に焼失しましたが、1594年天長院として開山。山門脇には子育て地蔵があります。

12 かぶと観音 かぶとかんのん 南木曽町読書 3272−5

木曽義仲が木曽谷の南の押さえとして妻籠城を築き、その鬼門に当たる神戸(ごうど)に祠を建て、兜の八幡座の観音像を祀ったのがおこりと伝えられています。

袖振りの松

袖振りの松は義仲が弓を射ようとした際、松の枝が邪魔だったので、巴御前が振袖で幹ごと薙倒したと伝えられています。松くい虫被害により先代の松が伐採され、かぶと観音堂の境内に木舟として再利用されています。現在は巴御前ゆかりの富山県南砺市の「巴塚の松」の実生苗木を植樹しています。近くには義仲が腰掛けたとされる「腰掛石」が残されています。

構成文化財⑯ 無形民俗文化財 木曽町

らっぽしょ祭り

（らっぽしょまつり）

■基本データ

住所	木曽郡木曽町日義徳音寺地区
アクセス	JR「宮ノ越駅」から徒歩約10分、伊那ICから25km30分
開催日	毎年８月14日
連絡先	木曽町役場日義支所／TEL 0264-26-2301

山吹山麓の徳音寺集落の子どもたちのお盆行事で、毎年8月14日の夜、山吹山へ登り「木」の字に並べられた木積に点火してから松明（たいまつ）を灯し、山を下り、木曾義仲のお墓をお参りするお盆行事。現在は日義地区の行事として発展し賑わっています。木曽馬に乗った木曾義仲の武者行列も町を練り歩きます。

現在の「らっぽしょ」行事

日義地区の子どもたちが夜7時ころ山吹山山頂で「木の字」に並べた木積を燃やし、松明を灯して下山、木曾義仲や巴御前等に扮した武者行列と一緒に徳音寺地区から徳音寺まで提灯を灯して行列をし、木曾義仲公墓前で「朝日将軍木曾義仲公万歳」を三唱します。

「木の字焼き」は、1973年（昭和48）に「らっぽしょ保存会」が発足した時から行われており、すでに50年以上続いています。

らっぽしょの起源

木曽氏12代信道（1389～1439）が1434年（永享6）に興禅寺を建立した頃から始まったと、木曽参考要貫伝記（江戸時代に書かれた物）に印されています。

義仲宣公の館が宮腰の橋詰というところにあり、正月21日に仏供をして豆腐と芋を奉供し、宣公祭は7月14日、15日宣公燈明として、上田栗本より松明を興禅寺へ奉ります。この儀式の世話を橋詰からゆかりのものが出かけて行ったと記録されています。

また、武居正二郎著『岐蘇古今沿革志』1914年（大正3）によると、『信道は父の親豊が築いた福島城に居住し、1434年（永享6）遠祖義仲を追福するために興禅寺を建立し、7月14・15日に例祭をもった。夜、東南にある火燃山に里人が登り松明に火をつけ寺に来て相呼叫び、騎馬武者も馳せ来て、太鼓・半鐘をならして凱旋を唱えた。』これは義仲の倶利伽羅峠の勝利を表したものといわれています。

室町時代から戦国時代、江戸時代と1868年（慶応4）まで430年、お盆の火祭り行事として続けられてきました。木曽の中心、福島から始まったこの行事は、義仲や木曽氏ゆかりの地である宮ノ越・原野・上田・野尻など、木曽の各地で行われたようです。

1868年（慶応4）まで続いた行事は、明治維新で松明が禁止され廃止となりましたが、1876年（明治9）の宮越青年会の記録によると再開すべく協議され、1892年（明治25）には「街中は松明から提灯に代え再開された」と記述されており、徳音寺集落だけで行われる行事となりましたが、少なくも120年以上昔から現在に近い形で行われてきた行事です。

■主要参考文献／
共同研究「ラッポショ考」
林 義泰・田中良作・三澤 弥・田中健治 昭和48年（1973）
「らっぽしょ」木曽町無形民俗文化財 らっぽしょ保存会
ラッポショの由来 神村 透（平成20年 公民館報掲載）
義仲の里の「らっぽしょ」狩戸 昭義（元日義村 教育長）
日義村村誌 下巻

構成文化財⑰ 文化

塩尻市・木祖村・木曽町・王滝村・上松町・大桑村・南木曽町・中津川市

木曽踊りと木曽節（きそおどりときそぶし）

■基本データ
- 発祥　木曽地域一帯
- 成立時期　未詳（室町時代の文献に記述あり）
- 連絡先　木曽踊（おどり）保存会（木曽町）
  木曽おんたけ観光局／TEL 0264-25-6000
  正調木曽踊あげまつ保存会（上松町）
  上松町観光情報センター／TEL 0264-52-1133

木曽踊りは、木曾義仲の供養のために行われますが、木曽節は「おんたけ節」に筏師の労働歌「なかのりさん節」などを取り入れたものとされています。

木曽踊りは木曾義仲公の戦勝を記念した霊祭のときに踊られた武者踊りが始まりと言われており、興禅寺境内には「木曽踊発祥之地の碑」があります。現在でも木曽の人々に多く親しまれ、お祭りで輪になって踊ります。

「なかのりさん」とは？

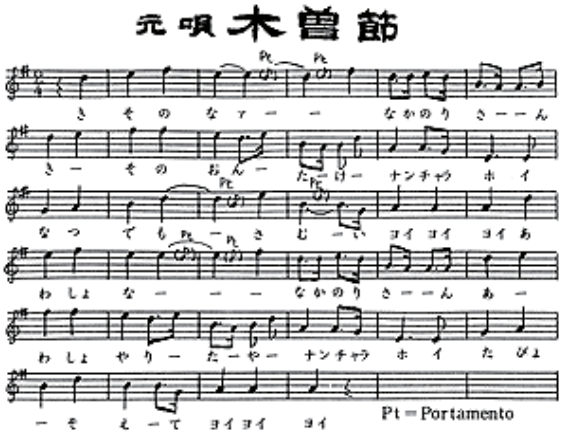
「なかのりさん」は誰のことを指すのでしょうか。有力な説は2つあり、ひとつは木曽川を筏で下るときに、筏の中央に乗った「中乗り」の称号という説です。

もうひとつは、「御座立て（おざたて）」という御嶽山にいる死者の声を聞く儀式からきているとするもの。このとき死者の声を生者に伝える役割を「中座」と言いますが、これは「中宣」を意味し、そこから「なかのり」になったという説です。この場合、他界した先祖が「なかのり」を通して、御嶽山は夏でも寒いと言っていると解釈できます。

木曽節は、木曽で歌われている民謡です。全国的にも「木曽のなかのりさん」から始まる一節は広く知られます。木曽踊りはこれに合わせて踊られるものです。

木曽谷では様々な民謡や踊りが伝えられ、木曽節はその代表的なものです。

木曽節は、尾張地方から、夏でも寒い木曽山へ働きに行く人に、家族が「あわせ」などを持たせてやるという意味がこめられており、尾張地方で発生したとも言われています。



さまざまなものがありますが、一般的な出だし部分は次のとおり。

「木曽のナァーなかのりさん
木曽のおんたけナンチャラホイ
夏でも寒いヨイヨイヨイ　袷（あわしょ）ナァなかのりさん
袷やりたやナンジャラホイ　足袋をそえてヨイヨイヨイ
心ナァーなかのりさん　心細いよナンチャラホイ
木曽路の旅はヨイヨイヨイ　笠にナァーなかのりさん
笠に木の葉がナンチャラホイ　舞いかかるヨイヨイヨイ」
（続く）

戦国時代と木曽ヒノキ

木曽地域と木年貢

長野県南西部、塩尻市から岐阜県中津川市にかけての木曽地域は、総面積 2,512 ㎢と小さな県に匹敵する広さを有します。遥かに仰ぐ御嶽山は古より魂の還る霊山として人々の信仰をあつめ、その裾野を流れる木曽川はヒノキの山林と奇岩の渓谷を映し、木曽川沿いに街道木曽路が続きます。

木曽路を包む木曽谷の約９割は森林地帯です。豊臣秀吉の時代、木曽地域は、狭い耕地の作物だけでは領民を養えない地域として、領民は米年貢（米の年貢）の代わりに木年貢（木の年貢）が課され、領民には木年貢を納めることで米が支給されていました。木年貢は、米が経済の基礎であった江戸時代になっても踏襲され、森林資源が木曽地域の人々のくらしを支えました。

木材需要の増大による森林資源の枯渇と厳しい森林保護政策

木曽ヒノキは、木曽谷の代名詞ともいえる樹種です。木目が緻密で優良な木曽ヒノキは、鎌倉時代に造られた木曽谷最古の神社である白山神社や池口寺薬師堂など、古来神社仏閣建築に重用されました。

約330年前から、伊勢神宮が 20年に１度、お宮を新たに建て替える 式年遷宮の際に用いる御神木としても使われ続けています。

この名木に危機が訪れたのは、江戸時代前期のことでした。戦国時代が終わり、安土・桃山時代以降、新たな町づくりが進められると、城郭・社寺建築の木材需要が急増し、全国的な森林乱伐をもたらしました。江戸幕府から良材の無尽蔵な宝庫と目された木曽谷は、江戸・駿府・名古屋の城と城下町などの建設のために膨大な用材が伐出され、深刻な森林資源の枯渇に陥りました。

木曽谷を所管する尾張藩は、江戸時代前期から木曽ヒノキなどの伐木への制限に乗り出しました。この制限は、江戸時代中期には木曽谷のほぼ 全域に及び、「木一本首一つ 枝一本腕一つ」といわれたヒノキなど木曽五木を伐れば死罪という徹底した森林保護となり、木年貢も廃止されました。この施策は、山林乱伐を防ぐ森林保護政策の先駆ではありましたが、森林資源でくらしを立てていた木曽の領民にとっては厳しい経済統制となりました。

木曽式伐木運材法

流路を巧みに利用した木曽式伐木運材法

木曽式伐木運材法とは、深い山に囲まれた木曽谷から木材を効率よく運び出すために考案された伐採と運搬の方法です。

木曽川支流や本流を利用して尾張国の白鳥湊まで、木材を流送させていました。

主なプロセスは、「伐倒」→「山落とし」→「小谷狩」→「大川狩」→「筏流し」という5段階です。

「伐倒」で樹木を根本から切り倒した後、「山落とし」で、小谷まで木材を下ろし、「小谷狩」という工程で本流まで木材を運び、「大谷狩」では丸太の状態で木曽川本流を運送。その後丸太を筏に組んだ「筏流し」で最終地点の白鳥湊まで運送しました。

伐木作業 1.伐倒

伐倒作業は、杣仕事の中で最も危険な作業とされていました。それは、伐倒方向の不確実性や単独作業等、様々な危険と隣り合わせだからです。

そこで先人は、「三つ紐切り」という伐倒方法を編み出しました。三つ紐伐りは、鼻緒伐りとも呼ばれ、木の幹に3方向から斧を入れ、3箇所につるを残して伐倒する方法です。この方法は伐倒方向が確実に決まるため安全で、立木が倒れるときに材への損傷が少ないことが特徴です。また、三つ紐伐りは、斧のみで立木を倒す方法で、熟練した斧を自由自在に操る技術が必要です。

三つ紐伐りは、昭和30年代に、アメリカ製のチェンソーが導入されたことにより、次第に使われなくなりましたが、20年毎に行われる伊勢神宮の式年遷宮の行事では、現在でも「三つ紐伐り」によって御神木を伐採しています。

伐倒作業風景

2.造材

造材作業は、枝払いと玉切りに分かれます。伐倒後、幹から梢端部に向けて枝打ち専用の斧で枝払いをし、立木を幹だけの丸裸状態にします。

玉切りは樹種ごとに寸法が決まっていて、竹を小割にして造った間竿によって長さを測定し、斧や鋸で切断しました。その後、楔を用いて木材を割ったり削ったりし角材や板材を造ります。また、材の前後を斧で削って丸く仕上げる頭巾巻きを行い、集材・運材による木材の割れ等を防ぎます。

枝払い風景

3.剥皮（はくひ）

木曽ヒノキの樹皮は、檜皮葺（ひわだぶき）で知られているように屋根にふきます。木曽では、蘭地区が檜皮葺で有名です。

山元で木材の剥皮をする目的は、木材の滑りをよくし、運材・集材作業を楽に行うためでした。

木曽式伐木運材図会【上巻】5.元伐(もとぎり)之図2

木曽式伐木運材図会【上巻】7. 墨打之図

集材作業 1.木寄せ

木寄せ作業とは、材木を寄せ集める作業で、「ボサ抜き」と「山落とし」に分かれます。ボサ抜きは、ササや灌木、払われた枝等から材木を引っ張り出す作業で、山落としは、傾斜面を落としたり引っ張ったりする作業です。この作業は、材木が滑りやすく地表も軟らかい雨の日や雨上がりに好んで行われていました。

修羅

2.修羅（しゅら）

修羅とは、丸太を弧形に並べてその上を木材を滑らせて、後ろから壊しながら前へ前へと運んでいく装置で、ただ地表を滑らせて運ぶものは土修羅と言いました。

「桟手（さで）」というものもあり、修羅と同様に材木を用いて流路を造り材木を下流に運ぶ装置ですが、修羅とは違い、流路となる面に板や木の枝、灌木を編んで置いたり、枝条を積み並べてその上を土砂で覆ったりしたもので傾斜が大きくなる場所に設けました。方向転換地点には木や枝、皮などを置いた「臼」を設けて、減速・転換の装置を備えていました。

また、傾斜が急な場合は、材木が滑って転がる可能性があり、割れや折れができたり小屋をつぶす恐れもありました。そのため、危険な箇所には「留め」といい、傾斜に反対の受け装置を備えました。

運材作業 1.小谷狩り

「小谷（こたり）狩り」とは、木曽川本流の合流点まで、修羅や桟手を使って材木を運ぶ工程をいいます。谷に材木を組んで空いた所に木皮や草、草の根などで水を漏れないよう堰を造り、水を溜めて材木を浮かべておき、堰に連なる流導路として修羅や桟手を組み込み、水切り装置を外すと一斉に水と材木が流れ出した「鉄砲出し」が造られます。堰を外した瞬間は豪壮だったそうです。

小谷狩り

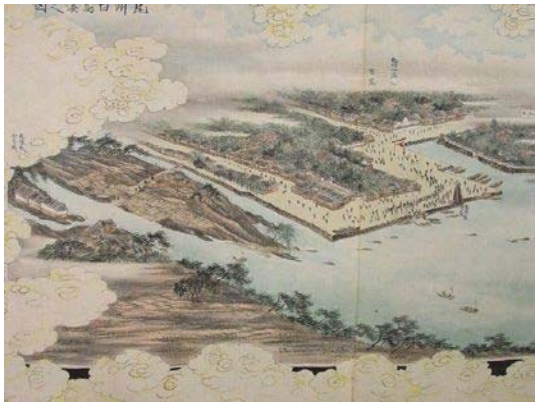
小谷狩りの留堰跡（とめぜきあと）

赤沢自然休養林に向かう途中の小川に、木曽式伐木運材法の遺構「小谷狩の留堰跡」があります。1904年（明治37）、当時の御料局によって築造されました。両岸の岩を掘り割って大がかりな堰を造った場所で、このような遺構が残っているところは、木曽でもほかにはありません。

2.大川狩り

木曽川本流から錦織綱場（現在、岐阜県八百津町）までの運材行程を、大川狩りといいます。川の流れを利用して材木を上手に流れに誘導する作業で、台風期が過ぎた9月以降に行われました。

また、錦織には材木を一端止める綱場があり、その場で材木を筏に組んで1つの筏に3人乗って、名古屋にある白鳥貯木場や伊勢湾の桑名まで運んでいました。



木曽式伐木運材図会【下巻】16.尾州白鳥湊之図1

「木曽式伐木運材図会」

江戸時代後期頃の木曽地方や飛騨地方で行われていた伐木や運材の技術についての絵図、「木曽式伐木運材図会」が現在、林業遺産に登録されています。「木曽式伐木運材図会」は、奥山で大木を伐採するところから、造材、搬出・集材、木曽川でのいかだによる流送、熱田白鳥木場（愛知県名古屋市）での集積、大型船による海上輸送までの様子が、絵巻物2巻（上巻10m×40cm、下巻13m×40cm）に、作業工程順に絵図と詞書で説明されています。

「図会」の作者、製作時期、製作目的、中部森林管理局に保管されている経緯等については、それらを明らかにする文献等が見つかっておらず明確ではありませんが、岐阜県高山市で江戸時代後期に製作された絵図をオリジナルとし、林業・木材産業に関する博覧会への出展や皇族・政府高官等への説明用として、明治時代に製作されたであろうと推測されています。

■資料提供／
中部森林管理局
住所：〒380-8575 長野県長野市大字栗田715-5
電話：026-236-2720（代表） 026-236-2721（夜間・休日）
法人番号：4000012080002

「木曽式伐木運材図会」
（きそしきばつぼくうんざいずえ）

木曽式伐木運材法

■参考文献／川に生きる～水運と漁労～　平成6年　岐阜県博物館

武田家と木曽氏

木曽氏のはじまり

戦国時代の後半期、木曽氏は地形の険しい木曽谷の要害と豊かな山林資源を背景とする木曽の領主として、小笠原氏、村上氏、諏訪氏と並んで信濃四大将の一人に数えられました。

その系譜について、木曽氏関係の諸記録は六条判官為義の孫、源義賢の次男義仲が、木曽に住んで木曽氏を称するようになったと伝えています。『西筑摩郡誌』で木曽氏の経歴をたどってみると、初代を木曾義仲とし、1233年（天福2）二代義重は将軍頼経から木曽と仁科を賜り、甲斐にいた弟の四郎義宗を迎えて木曽を譲ります。木曽を譲られた義宗は義茂と改め、以後、基家、家仲、家教と続き、家村のとき元弘・建武の争乱に際し、足利尊氏に属して軍功を上げ、尊氏から本領の木曽を与えられ、木曽氏中興の祖になったのだと伝えています。

木曽氏の発展

木曽氏において画期となったのは、尊氏に属して活躍したという家村の代です。系図を見ると家村の子らが木曽谷の各地に分出して、木曽谷の土豪である黒川氏、千村氏、馬場氏らの先祖になっています。尊氏に属して度々の戦功をあげた家村は信濃国、近江国などに所領を与えられ、讃岐守にも任官。そして、須原に館を構え、妻籠に城を築き、木曽の各所に砦を築き兵を置いたといいます。

家村ののち、家道・家頼・家親と続き、家親は1385年（正中2）に御嶽神社の若宮を建立、次の親豊は1400年（応永7）に須原と原野の間に道路を造り、同14年には小丸山城（福島城）、1430年（永享2）には須原に定勝寺を建立しています。そして、親豊の代における木曽谷全域にわたる領有化は、以後、順調に進んだようで、親豊四代の孫家賢による1455年（享徳4）の定勝寺住持補任状中に、木曽谷全域を象徴的にとらえた表現と考えられる「木曽庄」の文言が使用されていることからうかがわれます。

さらに家豊が1466年（文正元）に興禅寺に寄進したといわれる梵鐘銘には、「大檀那源朝臣家豊」とあったことが知られています。このことから、木曽氏が源氏を意識するようになり、木曾義仲の子孫であるという考え方を持つようになったのは家豊の時代であったと考えられます。

木曽氏と武田信玄

木曽氏が戦国時代を迎えるのは、家豊の子義元の時代のあたりからで、義元は小笠原氏に攻められた洗馬の三村氏を援けて出陣し小笠原氏に勝利しています。

一方、義元の息子の義在は木曽谷の道路改修に乗り出します。1533年（天文2）には、妻籠から新洗馬までの宿駅を定め、さらに、美濃国落合から塩尻に抜ける木曽の本道を開いて木曽を通過する旅人を増やし、また、材木の商品化にも努めるなどして経済力を高めていきました。このようにして、義在は内政の充実と、安定に富んだ政治状況を木曽谷全域に築いたといわれています。

1542年（天文11）、内政重視策をとった義在から家督を相続した義康は、小笠原長時や諏訪氏と友好関係を築きあげ、木曽氏は北信の村上義清、小笠原・諏訪氏と並んで信濃四大将と称されるまでの勢力に成長します。しかし、この時代は隣国甲斐の戦国大名武田晴信（のちの信玄）が急激に勢力を増している時期でもありました。

信玄は1542年（天文11）から3年ほどで諏訪・伊那方面を制圧し、さらに1548年（天文17）には府中の小笠原長時を塩尻峠の合戦に一蹴、中・南信の大半を軍事経略しました。この間、義康は福島城を拠点に防備を固め、翌18年には信玄の木曽来攻を鳥居峠に迎え撃ち一旦は撃退したものの、1555年（天文24）春に至って信玄が木曽攻略を本格化すると、ついに義康は信玄に屈服しました。

武田氏麾下（きか）の有力武将へ

武田氏に帰服した結果、義康は娘の岩姫を人質として甲府に送り、代わりに信玄の三女を息男義昌の妻女とする縁組を得ます。以後、木曽氏は武田氏の親族衆として厚遇されることになり、木曽谷の領知権は従前通り義康に安堵されました。

義康の跡を継いだ義昌は、1564年（永禄7）、信玄が飛騨の江馬時盛救援のために出兵を試みた際、宿臣の山村氏を派遣して信玄に加勢。この飛騨派兵後、義昌は、知行宛行（ちぎょうあてがい）などの領政文書を家臣に発給して、主従制を確立。領主・新国主としての戦国大名の形容を名実ともに整えました。

1573年（元亀4）に信玄が死没すると、後を嗣いだ勝頼が「長篠の合戦」に敗北して武田氏は衰勢に傾きます。そこで木曽義昌は、1580年（天正8）、織田信長の誘いに応じて武田氏に離叛（りはん）。勝頼は義昌を攻撃してきましたが、義昌は信長の武田討伐策との連携によって武田軍を撃退。木曽谷の当知行安堵のほかに安曇・筑摩両郡の一色宛行を受け、深志（ふかし）城主（今の松本城）の地位を得ました。

ところが、わずか三か月後「本能寺の変」が起こり信長が横死（おうし）すると、深志退城を余儀なくされ、今度は徳川家康と盟約を結びます。1584年（天正12）春、家康と豊臣秀吉との反目がこうじて「小牧・長久手の役」が生じる前後の段階で、義昌は家康との盟約を反故にして、次子義春を秀吉の人質に入れ秀吉と提携。その後、家康と秀吉の間に和議が成立、義昌はふたたび家康の麾下（きか）（指揮下に入ること）に繰り入れられることになりました。

木曽氏の没落

1590年（天正18）の小田原攻めの後、家康は関東に所替えとなりましたが、この折、義昌は、家康に豊かな山林資源を抱える木曽谷から下総国海上郡阿知戸（しもふさのくにかいじょうぐんあちど）のわずか一万石に移るよう命じられます。これよって、多くの譜代家臣も流浪させるほどに経済的にも逼迫（ひっぱく）した義昌は、1595年（文禄4）阿知戸城で不遇な晩年を終えたと伝えられます。

長子の義利は、叔父の上松義豊を殺害するなど粗暴な振る舞いによって、家康に追放されました。義利の改易後、義利の母真竜院（信玄の娘）は末子の義通を伴って木曽に帰り黒沢で静かに暮らしたと言われています。ここに至って、木曽谷を根拠地に戦国大名として覇を唱えた木曽氏は歴史の表舞台から脱落し、歴史の陰に埋没してしまいました。

木曽氏の墓　韮崎市重要有形文化財

韮崎市藤井町の光明寺に木曽氏の墓があります。墓碑に「嫡子千太郎殿十三歳、同老母七十歳。同息女十七歳」と刻まれています。

木曽福島城主、木曽義昌は当時武田方についていました。その為、嫡男千太郎は武田勝頼に人質として韮崎の地におかれていました。

1581年（天正9）に義昌は織田方に寝返り、その裏切りを知った勝頼は激怒します。その翌年、織田信忠（織田信長長男）軍に追われ、韮崎の新府城を脱出する1582年（天正10）3月1日、新府城を人質もろとも焼き払いました。木曽義昌の母、娘、千太郎とも処刑されたといわれています。

後年、千太郎を預かっていた勝頼の家臣、上野豊後守の子孫が、戦国の世に消えた三人を哀れみ、光明寺を建立しました。

写真提供／光明寺
韮崎市藤井町　木曽氏の墓

■参考資料／『木曽福島町史』

構成文化財❺

文化	
塩尻市	大桑村

そばきりはっしょうのさと

蕎麦切り発祥の里

■基本データ

名称	本山そばの里
住所	塩尻市宗賀4404ー1
営業時間	11:00〜16:00
定休日	4〜12月は無休。1〜3月は月曜日。
連絡先	TEL 0263-54-6371
アクセス	JR「日出塩駅・洗馬駅」からタクシーで約10分

マップQR

名称	定勝寺
住所	木曽郡大桑村須原831-1
アクセス	JR「須原駅」から徒歩10分
営業	8:30〜17:00（冬季は16:00頃）
定休日	無休
料金	大人300円、子ども100円
連絡先	定勝寺／TEL0264-55-3031
指定	国重要文化財（1952年）

マップQR

現在のように蕎麦を切って食すようになるのが、いつ・どこで始まったのかについては諸説あり定かではありませんが、文書等で塩尻市の本山宿、大桑村の定勝寺を発祥とする記録が残されているなど、木曽谷が蕎麦切り発祥の里の有力地の一つとして考えられます。

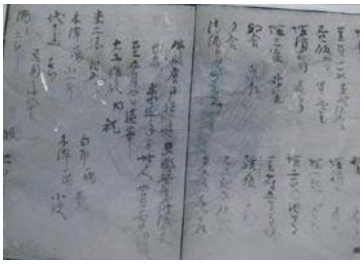
発祥の里①塩尻市本山宿

「風俗文選*（ふうぞくもんぜん）」によると「蕎麦切りというのは、もと信濃の国本山宿より出て、あまねく国にもてはやされける・・」とあり、同地が蕎麦切り発祥の地の一つとされています。本山宿近くの国道沿いには「蕎麦切り発祥の里」の木柱が建てられています。

＊**風俗文選（ふうぞくもんぜん）**　芭蕉の門下、森川許六により宝永4年（1707）芭蕉・素堂・其角ら蕉門俳人29人の文章116編を収録した俳文集。

発祥の里②大桑村定勝寺

番匠作領（料）日記（1573〜1577年（天正元〜天正5））に「振舞ソハキリ」金永、「ソハフクローツ千淡内」ほかに強飯（おこわ）、清酒、豆腐、白米などと記されています。大桑村の定勝寺の仏殿修理工事にそば切りを振る舞ったという記録が残っています。



定勝寺・古文書に見る「振舞ソハキリ」が登場する「番匠作事日記」（部分）

地産地消ならではの蕎麦

本山宿にあるそば店「本山蕎麦の里」では、店の周りの畑に地元の住民が蕎麦の種を撒き、収穫、製粉、手打ちした蕎麦を提供し、今でも地産地消ならではの蕎麦の味を楽しめます。秋になると店の周囲では真っ白な蕎麦畑の景色が望めます。

また、木曽では冬に温かいそばに「すんき」を入れて食べる「すんきそば」が風物詩になっている地域があるほか、開田高原では柄のついた篭に茹でた蕎麦を入れ、だし汁の入った鍋にくぐらせて食べる「とうじそば」があるなど、地域独特の食べ方で風情を楽しむことができます。

構成文化財❼ 史跡 木祖村

木祖村史跡 鳥居峠（きそむらしせき とりいとうげ）

■基本データ
住所 木曽郡木祖村大字薮原
指定 村史跡
連絡先 （一社）木祖村観光協会
／TEL 0264-36-2543

マップQR

木曽路の北端、薮原宿と奈良井宿の間にある旧中山道に位置する、標高1,197mの約6kmの峠道です。中山道の中で最も難所といわれました。峠の東麓は奈良井で、西麓は木祖村薮原となり、頂上は木祖村に属します。木曽川と信濃川の上流である奈良井川の分水嶺です。

頂上からは、西に御嶽山、南に駒ヶ岳、北は木曽ヒノキの国有林を望み、眼下には木曽川と小木曽、薮原の家並みが見えます。最寄りの藪原駅から頂上までは約3km、頂上から奈良井駅まで3.6km。1971年（昭和46）に「信濃路自然歩道」として長野県から指定されました。

名前の由来となった鳥居や御嶽山遥拝所、芭蕉の句碑などの史跡、トチの木の巨木の群生地などがあり、趣豊かなトレッキングコースとして、新緑や紅葉の季節は多くのハイカーが訪れます。

鳥居峠の歴史

峠の歴史は古く、713年（和銅6）の「続日本記（しょくにほんぎ）」に、吉蘇路（きそじ）の開通、879年（元慶3）「日本三代実録」に信濃と美濃の国境とされた県坂岑（あがたざかみね）の峠が記されています。この県坂岑が鳥居峠といわれています。

その後、中世には奈良井峠、薮原峠と呼ばれました。峠の呼称は超えていく先の地名で呼ぶ習わしがあったため、奈良井から越える人には薮原峠であり、薮原から越える人にとっては、奈良井峠でした。

鳥居峠と呼ばれるようになったのは、戦国時代。頂上には古くから「御嶽の四門」のひとつといわれた遥拝所（ようはいじょ）がありました。1492～1501年（明応年間）木曽義元が松本の小笠原氏と戦った際、ここから御嶽大権現を遥拝（ようはい）して戦勝を祈願したところ、大勝利をおさめました。戦勝の礼として、義元がここに鳥居を建てたことから、以降は鳥居峠と呼ぶようになったと言われています。

戦国時代、この峠は木曽氏の木曽防衛の要衝となり、天文、天正の二度、甲州勢をここで打ち破った古戦場でもあります。丸山公園には芭蕉らの句碑とともに、古戦場の由来を記した石碑が建っています。

江戸時代は、中山道を往来する人々でにぎわい、頂上には茶屋が設けられていました。

遥拝所付近には御岳を信仰する講社の人々が建てた霊神碑が立ち並び、往時の賑わいぶりが偲ばれます。江戸時代末期には、皇女和宮もここを通りました。

1910年（明治43）に国鉄中央西線の鳥居トンネルが開通してからは通行人が途絶えました。

■主要参考文献／『木曽～歴史と民俗を訪ねて』（木曽教育会郷土館部編著 信教出版部 2010）
『木曽の鳥居峠』（木曽郡木祖村教育委員会 1974） 『木祖村の文化財めぐり』（木曽郡木祖村教育委員会1986）

構成文化財❽ 史跡 木祖村

鳥居峠のトチノキ群

とりいとうげのとちのきぐん

■基本データ

住所　木曽郡木祖村大字薮原

指定　村天然記念物

連絡先　（一社）木祖村観光協会／TEL 0264-36-2543

マップQR

鳥居峠のトチノキ群は村の天然記念物に指定されています。。栃の木の巨木が林立し、断崖に大きな穴のあいた古木があります。

●芭蕉の句碑

遥拝所の近く、丸山公園には４基の句碑があります。江戸時代の木曽谷では上級町人の間で俳諧が流行し、木曽路11宿の街道沿いに句碑が12基も建てられました。そのうちの三分の一が鳥居峠にあります。芭蕉の句碑は以下の２つです。

「木曽の栃 うき世の人の 土産かな」
「ひばりより うへにやすらふ 峠かな」

●日本一高い森林測候所跡

丸山公園の下方の平地には、明治41年に木祖森林測候所が設けられ、気象観測が行なわれていました。当時、森林測候所のなかで最も高い標高にあることで有名だったといいます。

●御嶽神社（御嶽遥拝所）

境内には御岳山を信仰する講社の信者が建てた霊神碑や神像が立ち並んでいます。御嶽山を望む遥拝所の案内版があります。

●「子産の栃」の伝承

鳥居峠には栃の大木があります。昔、この幹の空洞に捨て子があり、子宝に恵まれなかった薮原の夫婦がひきとって育て、幸せにしたという「子産の栃」伝説が残っています。この実を煎じて飲むと子宝に恵まれるといういい伝えがあります。

●葬沢（ほうむりさわ）の伝承

木曽・武田軍がこの峠で激突し、武田軍は敗北し、亡くなった兵士と馬で谷が埋まったといわれています。

●菊池寛の小説の舞台となった「中の茶屋」跡

菊池寛の『恩讐の彼方に』の主人公が浅草で人を殺し、主人の妾と逃亡した先で始めたのが、この茶屋という設定です。

観光ガイド
●中山道鳥居峠越えコース

（一社）木祖村観光協会では、薮原宿～鳥居峠～奈良井宿間を有料ガイドの派遣をおこなっています。

薮原駅~本陣跡～御鷹匠役所跡～消防署横～石畳分岐～丸山公園～御嶽神社（御嶽遥拝所）～峠の茶屋～中の茶屋～鎮神社～奈良井駅

所要時間：約3時間（峠越えのみ）

＊薮原宿・奈良井宿の散策、鳥居峠での昼食などのオプションを含むと約４時間

料金：5,500円（1名～5名）、8,500円（6名～15名）

連絡先：（一社）木祖村観光協会／TEL0264-36-2543

構成文化財㉝ 史跡 南木曽町

妻籠城跡（つまごじょうあと）

■基本データ

住所　長野県木曽郡南木曽町吾妻

アクセス　JR「南木曽駅」から徒歩約40分、保神・馬籠行きバスで10分（妻籠下車）。中津川ICから約30分

連絡先　（一社）南木曽町観光協会／TEL 0264-57-3123

指定　県史跡（2004年）

マップQR

城郭構造：山城　築城主：遠山氏（推定）
築城年：室町時代中期　廃城年：元和2年（1616年）
遺構：曲輪、空堀など

戦国時代に整備された城跡。1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いの時も妻籠城に軍勢が入っています。曲輪や空掘などは原型をよくとどめています。

妻籠城は木曽谷の南を固めた城で、主郭・二の郭・空堀・曲輪（くるわ）をそなえた規模の大きな山城でした。

1584年（天正12）の小牧・長久手の戦いで、徳川の大軍に対し難攻不落を誇ったと伝えられており、ここが木曽谷の命脈を握る要衝であったことがわかります。1616年（元和2）の一国一城令により、廃城になりました。

現在は主郭跡などが広場となって解放されており、眼下に妻籠宿、馬籠峠・三留野の眺望がすばらしいです。

妻籠城の歴史

妻籠の城山は、木曽川と蘭川（あららぎがわ）の合流点を眼下に望む独立峰（高さ521m）で、典型的な山城の形態を持っています。いつの時代に築かれたものか判明していませんが、15世紀前半には藤原氏（後の木曽氏）が木曽谷一円を支配したので、室町時代中期には築城されていた可能性があります。

木曽は地理的に重要であり、とくに妻籠は何度も攻防の拠点となりました。このため戦国時代の木曽氏は、甲斐から南下を企てる武田信玄・勝頼と、阻止しようとする織田信長という強力な武将の間で小大名の苦悩を味わい、その後も豊臣秀吉と徳川家康の間で揺れ続けました。

1584年（天正12）、秀吉と家康が天下を賭けて激突した小牧・長久手の戦いにおいて、秀吉側についた木曽義昌は家臣の山村良勝に妻籠城を守らせました。軍勢はわずかに300騎。対する家康方は7,000余騎。数の上では圧倒されましたが、籠城作戦が功を奏し、家康軍を敗走させました。

江戸時代に山村良景が編述した『木曽考』には、妻籠城を「四方を高山が囲み、松柏が茂り、後には木曽川が流れている要害の地」と記し、攻め上る家康軍に城中から大石大木を投げ出し、鉄砲を撃ちかけて撃退する様子を記述しています。その後籠城が続くも、木曽軍は与川地区（よがわちく）の郷民に旗を持たせてのろしをあげ、夜にはかがり火を焚き、秀吉方から援軍が来たと思わせる等の策略を用い、ついに家康側を敗北に追い込んでいます。

このとき籠城した者の中には、後に馬籠の問屋・本陣を勤め、子孫に島崎藤村を生み出す島崎監物がいました。

木曽氏は程なく移封されましたが、家臣たちは関が原の戦いで今度は家康側について妻籠城に陣を構え、秀忠軍を迎えました。家康は大阪冬の陣でも妻籠城に軍勢を配していましが、それ以降は廃城となり、現在では空堀の痕跡が往時の名残をとどめています。

城山からの妻籠宿・馬籠峠の眺望